



逸翁美術館コレクション 蕪村・呉春と茶の湯の名品

会期 | 2026年9月16日(水)～11月8日(日)



サントリー美術館(東京・六本木)は、2026年9月16日(水)～11月8日(日)まで「逸翁美術館コレクション 蕪村・呉春と茶の湯の名品」を開催いたします。

逸翁美術館は、阪急東宝グループ(現・阪急阪神東宝グループ)の創業者として知られる近代日本を代表する実業家・小林^{いちぞう}一三(1873～1957)の雅号「逸翁」を冠して、昭和32年(1957)に大阪・池田市に設立されました。人々と美を分かち合う姿勢に貫かれた5,500件におよぶコレクションは、逸翁の多方面での豊かな業績と進取の気風に富む人間性を反映し、古筆切、茶道具から与謝蕪村・呉春^{ごしゅん}の絵画に至るまで実に多岐にわたります。今回は、その選りすぐりの名品が一堂に会する待望の展覧会となります。

逸翁・小林一三は、明治6年(1873)に山梨県巨摩郡河原部村(現・韮崎市)に生まれました。慶應義塾に学び、三井銀行勤務を経て、阪急電鉄をはじめ、阪急百貨店、東宝などの阪急東宝グループ(現・阪急阪神東宝グループ)の創業者となりました。また戦前戦後の商工大臣、国務大臣兼戦災復興院総裁を歴任するなど、明治・大正・昭和の実業界・政界に大きな足跡を残しました。さらに宝塚歌劇の創設をはじめ演劇界・映画界においても重要な役割を果たしています。逸翁は学生時代より新聞に小説を掲載するなどの文筆活動を行い、また生涯を通じ近代数寄者として様々な人物と交流し、伝統のみに止まらない新たな茶道論を提唱したことで注目されます。逸翁が収集したコレクションの一点一点には、逸翁の好みと美術への深い造詣がうかがわれます。



小林一三・雅号「逸翁」(1873～1957)

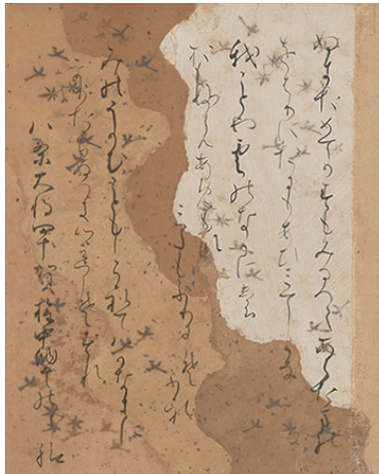
※出品作品はすべて、公益財団法人阪急文化財団蔵

※作品保護のため、会期中展示替を行います。【前期】9月16日～10月12日 【後期】10月14日～11月8日

展示構成

※展覧会場では、章と作品の順番が前後する場合があります。また、展示内容は予告なく変更される場合があります。

第1章 古筆・経巻



(右) 重要文化財 佐竹本三十六歌仙切 藤原高光 伝 藤原信実画・伝 後京極良経詞書 一幅 鎌倉時代 13世紀 【後期】
(左) 石山切 伊勢集「ぬきためて」 伝 藤原公任 一幅 平安時代 12世紀 【前期】

古筆切^{こひつぎれ}とは古人の優れた筆跡の巻物や冊子から一部分を切りとった断簡のことをいいます。多くは鑑賞のために掛軸に表装され、あるいは手鑑・屏風に貼られ大切にされてきました。逸翁美術館は伝 小野道風筆の「継色紙」など、平安・鎌倉時代にさかのぼる古筆切を多数収蔵しています。『谷水帖』は、近代数寄者である鈍翁(益田孝)が、所蔵した古筆二十四葉を手鑑に仕立てたもので、「石山切」「高野切」に代表されるように、優美な仮名文字や華麗な料紙装飾が見どころです。貴重な「佐竹本三十六歌仙絵巻」は、大正8年(1919)に一歌仙ごとに分割され、逸翁は「藤原高光」を入手しています。さらには「楞伽経」^{りやうがきやう}「目無経」^{めなしきやう}(白描絵料紙金光明経)^{じっかんしやう}「十巻抄」などの経典・経巻類も充実しており、逸翁コレクションの格調の高さを物語っています。

- 主な出品作品**
- ・重要文化財 佐竹本三十六歌仙切 藤原高光 伝 藤原信実画・伝 後京極良経詞書 一幅 鎌倉時代 13世紀
 - ・石山切 伊勢集「ぬきためて」 伝 藤原公任 一幅 平安時代 12世紀
 - ・重要文化財 継色紙「あまつかぜ」 伝 小野道風 一幅 平安時代 10世紀
 - ・重要文化財 古筆手鑑「谷水帖」二十四葉 一帖 平安～鎌倉時代 11～13世紀
 - ・重要文化財 楞伽経 巻第二 一卷 天平20年(748)
 - ・重要文化財 白描絵料紙金光明経巻第二断簡(目無経) 一卷 建久3年(1192)
 - ・重要文化財 十巻抄 十巻のうち二巻 延慶2年(1309)

第2章 中世・近世の絵画と工芸



重要文化財 芦引絵 五巻のうち一巻 室町時代 15世紀 【通期・巻替あり】

逸翁が収集したコレクションには、鎌倉時代の「地藏十王像」や室町時代の稚児物語を絵画化した「芦引絵」のように、仏画や絵巻、奈良絵本においても優品が含まれています。豊臣秀吉(1537～1598)の面貌をとらえた「豊臣秀吉画像」には「これがよくに(似)申よしきい(貴意)にて候」との書入れがあり、没後に多数制作された「豊国大明神画像」の元となった貴重な画稿です。ほぼ同時代の「三十三間堂通矢図屏風」や「露殿物語絵巻」では近世初期における人々の生活風俗がいきいきと描写されています。

また室町將軍家の座敷かざりに代表されるように、日本では中国を中心として異国からもたらされた唐物が珍重されてきた歴史があります。逸翁美術館の収蔵品のなかでは「犀皮稜花盆^{さいひりょうかぼん}」、「堆黒蝶果盆^{ついこくちょうかぼん}」といった中国漆器や、日本の蒔絵技術で装飾され輸出された南蛮漆器である「花鳥蒔絵螺鈿洋櫃^{つけたり} 付 籐編外櫃」、さらには染織の金更紗など、海外の様々な地域の美意識がうかがわれる工芸品も所蔵されており、コレクションの文化史的な意義を高めています。



重要文化財 豊臣秀吉画像 狩野光信
一幅 桃山時代 16世紀 【前期】

主な出品作品

・重要文化財 芦引絵	五巻のうち一巻	室町時代	15世紀
・重要文化財 豊臣秀吉画像 狩野光信	一幅	桃山時代	16世紀
・重要文化財 三十三間堂通矢図屏風	六曲一隻	桃山時代	17世紀
・露殿物語絵巻	五巻のうち一巻	江戸時代	17世紀
・犀皮稜花盆	一口	南宋時代	12～13世紀
・重要文化財 花鳥蒔絵螺鈿洋櫃 付 籐編外櫃	一合	桃山時代	16～17世紀

第3章 蕪村と呉春 近世諸派の絵画



重要文化財 奥の細道画卷 与謝蕪村 二巻のうち 安永8年(1779) 【通期・巻替あり】

江戸時代の与謝蕪村(1716～1783)と呉春(1752～1811)の作品群は、俳諧を趣味とした逸翁のコレクションの中核として、充実した内容を備えています。俳諧の名手であった蕪村にとって、五七五の俳句に簡略で洒脱な絵を添えた〈俳画〉は、第一人者として自負も抱いていたジャンルです。なかでも「花見句画賛」「石画賛」は蕪村自らの俳句と文字、絵の魅力がみごとに融合した優品です。また「奥の細道画卷」は蕪村が敬愛してやまない松尾芭蕉の紀行文『奥の細道』を絵入りで写した俳画の集大成というべき代表的作品です。今回は会期中巻替えをしながら全巻をご覧ください。貴重な機会となります。

蕪村の弟子であった呉春(松村月溪)は、逸翁美術館のある池田^{くれは}(呉服の里)に一時期住んでいたというゆかりも深い人物でした。蕪村の没後には円山応挙のもとで画作をするようになり、「松下游鯉図」「岩上孔雀図」には応挙の写生画風の影響がうかがわれます。呉春が描いた「白梅図屏風」は逸翁美術館を代表する屈指の名品です。夜の情景を暗示するごとく藍色に染められた特殊な背景に、白い花を咲かせた梅の枝が闇から浮かび上がるような画面に静かに向き合うと、呉春の師であった蕪村の辞世の句「白梅に明くる夜ばかりとなりにけり」が自ずと念頭に浮かんできます。他にも円山四条派に連なる長沢芦雪、松村景文や、谷文晁、森狙仙などの個性豊かな絵師たちによる江戸絵画の競演も見どころとなっています。



花見句画賛 与謝蕪村
一幅 江戸時代 18世紀
【後期】



重要文化財 白梅図屏風 呉春 六曲一双 江戸時代 18世紀 【通期】

主な出品作品

・重要文化財 奥の細道画卷	与謝蕪村	二巻	安永8年(1779)
・晩秋遊鹿図屏風	与謝蕪村	四曲一双	江戸時代 18世紀
・闇夜漁舟図	与謝蕪村	一幅	江戸時代 18世紀
・花見句画賛	与謝蕪村	一幅	江戸時代 18世紀
・重要文化財 白梅図屏風	呉春	六曲一双	江戸時代 18世紀
・松下游鯉図	呉春	一幅	江戸時代 18世紀
・嵐山春曉図	円山応挙	一幅	安永9年(1780)
・降雪狗児図	長沢芦雪	一幅	江戸時代 18世紀

第4章 逸翁の茶道具



黒樂筒茶碗 惺斎追銘「老松」
樂長次郎
一口 桃山時代 16世紀 【通期】



五彩蓮華文呼継茶碗 逸翁銘「家光公」
一口 元時代 13世紀 【通期】



草花文緑ガラス小壺(茶器)
イタリア 一口 18世紀 【通期】

逸翁は、実業家としても茶人としても、松永安左エ門(雅号・耳庵^{じあん} 1875～1971)や五島慶太(雅号・古経楼^{こきやうろう} 1882～1959)などと深い交友を結び、茶会をひらいては自慢の道具の取り合せを共に楽しみました。茶入、茶碗、花入、水指といった逸翁美術館が所蔵する茶道具は、いずれも逸翁の審美眼によって選ばれ、好んで茶会に使用された器ばかりです。なかには「五彩蓮華文呼継茶碗」における逸翁銘「家光公」のように逸翁が自ら銘を付けた茶碗も少なくありません。逸翁は旧来の伝統にとらわれることなく椅子席の茶室を設けたり、外遊の際には積極的に西洋の陶磁器やガラス器を入手して持ち帰り、茶器に見立てて茶会に転用したりしてみせました。セーヴル窯の「赤地金欄手写花鳥文壺(水指)」や、「草花文緑ガラス小壺(茶器)」はその代表的な例であり、逸翁コレクションに華やかな彩りを添えています。さらに懷石料理に井物や洋食を取り入れるなど創意工夫を試みており、新たな茶の湯の在り方を提案しました。

主な出品作品

・瀬戸大瓶手茶入 松平不昧歌銘「紅」	一口 室町時代 15世紀
・五彩蓮華文呼継茶碗 逸翁銘「家光公」	一口 元時代 13世紀
・黒樂筒茶碗 惺斎追銘「老松」 樂長次郎	一口 桃山時代 16世紀
・朝鮮唐津德利花入	一口 桃山時代 16世紀
・青花葡萄文水指(古染付)	一口 明時代 17世紀
・色絵龍田川文向付 尾形乾山	六口 江戸時代 18世紀
・草花文緑ガラス小壺(茶器) イタリア	一口 18世紀
・赤地金欄手写花鳥文壺 フランス セーヴル窯	一口 19世紀

第5章 近代芸術家と逸翁



朱地君が代楽譜蒔絵棗 兪好斎好
三砂良哉
一合 昭和時代 20世紀 【通期】



黒地歌劇雛祭楽譜蒔絵棗 逸翁好
三砂良哉
一合 昭和8年(1933) 【通期】

逸翁は評価が定まった過去の名品にとらわれず、同時代を生きる画家や工芸作家の新作にも魅力を見出し、積極的に交流を結び制作を支援しました。逸翁が三井銀行に勤務していた明治34年(1901)頃には^{かぶら ききよかた}鍋木清方(1878～1972)から「八幡鐘図」を購入したことが知られます。とくに絵画における^{すずき か せん}鈴木華邨(1860～1919)と、漆工における^{み さごりようさい}三砂良哉(1887～1975)は、逸翁の好みに合致したようで、今もなお、それぞれ多数の作品が収蔵品として大切にされています。

「黒地歌劇雛祭楽譜蒔絵棗」は、棗の蓋と身の合わせの部分に逸翁自作の歌劇「雛祭」の楽譜を蒔絵の意匠として施したもので、宝塚歌劇二十周年の記念茶会で用いるために逸翁が良哉に作らせた独創的な茶道具です。他にも、北大路魯山人(1883～1959)や河井寛次郎(1890～1966)、与謝野晶子(1878～1942)などの作品における制作経緯には逸翁との交流を物語るエピソードが知られており注目されます。



菜花狗児図 鈴木華邨
一幅 明治39年(1906) 【前期】

主な出品作品	・八幡鐘図	鍋木清方	一幅	明治34年(1901)
	・菜花狗児図	鈴木華邨	一幅	明治39年(1906)
	・源氏物語五十四首和歌短冊	与謝野晶子	五十四枚	大正9年(1920)
	・春景富士図	川合玉堂	一幅	昭和時代 20世紀
	・朱地君が代楽譜蒔絵棗 兪好斎好	三砂良哉	一合	昭和時代 20世紀
	・黒地歌劇雛祭楽譜蒔絵棗 逸翁好	三砂良哉	一合	昭和8年(1933)
	・花文扁壺	河井寛次郎	一口	昭和16～17年(1941～1942)
	・染付開扇形香合	北大路魯山人	一合	昭和時代 20世紀

第6章 逸翁の思い 「朗らかに、清く、正しく、美しく。」



扁額「藝又藝」 小林一三 昭和時代 20世紀 【通期】

逸翁が筆を揮った「藝又藝」は、日本舞踊家の花柳緑寿に贈った扁額で、芸の道に終わりはなく、学び続け、生涯歩み続ける道なのだという逸翁の教えに触れることができる言葉です。

宝塚歌劇団に常に掲げられる「清く、正しく、美しく」という逸翁の理念は、もともとは「朗らかに、清く、正しく、美しく」と語られたことが知られています。蕪村の俳画や、洒落た逸翁銘、おおらかな茶器の見立てを思い合わせると、この逸翁の言葉の響きには、逸翁美術館のコレクション全体にも通じる晴朗な趣きを感じられるといえるでしょう。

逸翁は生前、「一都市一美術館」という構想を思い描いていました。海外視察を経たのちに、国立の美術館・博物館だけではなく、日本の各小都市にも一つの美術館を持ちたいものだと願い、いずれは美術館を開設することを見据えて各ジャンルの作品収集にも力を注いでいました。残念ながら逸翁は、昭和32年(1957)春に、この夢が実現する前に他界しましたが、逸翁美術館は、まさにその遺志によって設立された美術館に他なりません。

その4年後、昭和36年(1961)に、東京・丸の内のパレスホテル9階に開館したのがサントリー美術館です。実は逸翁の次女・春子は、サントリーの創業者である鳥井信治郎の長男・吉太郎と結婚しています。深いつながりをもつ逸翁美術館とサントリー美術館は、いうなれば親戚のような美術館といえましょう。この章では、明治・大正・昭和の激動の時代に、茶の湯を通じて日本美術に深く携わり、「一都市一美術館」を構想した逸翁の、多角的な業績と生涯を辿ります。

主な出品作品

- ・扁額「藝又藝」 小林一三 一面 昭和時代 20世紀
- ・「清・正・美」扇面 小林一三 一幅 昭和時代 20世紀

逸翁美術館コレクション 蕪村・呉春と茶の湯の名品

会 期	2026年9月16日(水)～11月8日(日) ※作品保護のため、会期中展示替を行います。
主 催	サントリー美術館
協 賛	三井不動産、鹿島建設、竹中工務店、サントリーホールディングス
特別協力	阪急文化財団
協 力	阪急電鉄、宝塚歌劇団
会 場	サントリー美術館 東京都港区赤坂9-7-4 東京ミッドタウン ガレリア3階 アクセス(東京ミッドタウン[六本木]まで) 都営地下鉄大江戸線六本木駅出口8より直結 東京メトロ日比谷線六本木駅より地下通路にて直結 東京メトロ千代田線乃木坂駅出口3より徒歩約3分

基本情報

開館時間	10時～18時 ※金曜日および11月7日(土)は20時まで、10月31日(土)は六本木アートナイトのため開館時間延長 ※いずれも入館は閉館の30分前まで
休 館 日	火曜日(9月22日、11月3日は18時まで開館)
入 館 料	・当日券：一般1,700円、大学生1,200円、高校生1,000円 ・前売券：一般1,500円、大学生1,000円、高校生800円 ※中学生以下無料 ※サントリー美術館受付、サントリー美術館公式オンラインチケット、ローソンチケット、セブンチケットにて取扱 ※前売券の販売は7月8日(水)から9月15日(火)まで ※サントリー美術館受付での販売は開館日のみ
割 引	・あとろ割：国立新美術館、森美術館の企画展チケット提示で100円割引 ・団体割引：20名様以上の団体は100円割引 ※割引適用は一種類まで(他の割引との併用不可)

イベント情報

| 展覧会関連プログラム |

講演会「雅俗の人・小林一三——阪急沿線文化の誕生と美術コレクション——」

講師：宮井肖佳 氏（公益財団法人阪急文化財団 逸翁美術館 主任学芸員）

日時：10月12日（月・祝）14時～15時30分

会場：6階ホール

定員：100名

料金：800円（別途要入館料）

※オンラインにてチケットをご購入ください。予定枚数に達し次第締め切ります。

メンバーズクラブ先行受付 8月28日（金）12時～9月1日（火）（席数限定、先着順）

一般受付 9月4日（金）12時～（先着順）

詳細は当館ウェブサイトをご覧ください。追加のプログラムを開催する場合もウェブサイトでご案内します。

お問い合わせ

一般お問い合わせ

TEL：03-3479-8600

美術館ウェブサイト

<https://www.suntory.co.jp/sma/>

広報画像のお申込み

<https://www.suntory.com/sma/press/exhibition/v94r7P/upload/itsuo0618.pdf>

報道関係のお問い合わせ

サントリー美術館「逸翁美術館コレクション」広報事務局（株式会社TMオフィス内）

担当：馬場・永井・西坂

TEL：050-1807-2919 E-mail：itsuo@tm-office.co.jp

美術館への取材に関する
お問い合わせ

サントリー美術館 〔学芸〕石田 〔広報〕光田

E-mail：sma-pr@suntory.co.jp

以 上